

《座談会》

同志社を語る



出席者

北九州大学学長 今中次磨

九州大学教授 具島兼三郎

九州大学教授 高木暢哉

九州大学教授 高木幸二郎

前北九州市市長 吉田法晴

(司会) 同志社総長 住谷悦治

法学部創設のころ

住谷 同志社では創立一〇〇年を数年後にひかえ、これまでの同志社のあり方を反省し、将来どのように進展せしめたらよいかという問題と取組んでおります。また一昨年『同志社九十年小史』を作りましたけれども、これはあくまで「小史」なんで、一〇〇年史は更に正確なものにしたいと念願しております。そこで今日はかつて同志社で生活せられた先生方にお集まりいただき、いろいろなお話やご注意を承りたいと存じます。

まず先生方と同志社との関係について伺いたいと思いますが、いちばん始めに今中先生。

今中 ここではいちばん古いでしょう。

住谷 先生が同志社へ来られた理由は吉野作造先生か海老名先生か何かそういう関係ですか？

今中 私がまいましたのは大正八年四月一日付だったと思いますが、同志社に行く契約ができたのは前年の七月ですね。その頃、わたしは父親から学資を二十五円づつもらっていたので、それだけ同志社からもらったと思

うんです。七月から三月まで研究費をいただいて、東大の図書館にひき込もって講義の準備をして、四月から同志社に赴任したわけですよ。

同志社大学はたしか大正九年に大学に昇格になりましたが、そのために教員を集めていた。その当時の総長は原田助さんでしたが、私は原田先生のご令息の原田健君と大学は同期で、東大YMCAの關係で多少のつきあいはありました。が原田健君との關係はそれまででした。そのお父さん、原田助さんが総長で大学昇格の準備をなすっていたわけですよ。

同志社に法学部を作るため教員を集めているという話が最初に伝わってきたのは、私の先輩であり、友人でもある山本亀市君からです。山本君というのは五高、東大を通じて私の一年先輩であり、なかなかのやり手で、将来は「政治家として大物になる」と自他ともに許していた人物ですが、不幸にして胸を悪くし、ほとんど学校へ出なかった。療養しつつ卒業したわけですね。これが療養中で、まだ就職する段階になっていなかった。それが「同志社に來ないか」という話をどこかから――吉野先生ですかねえ、はっきりしませんか

受けてきた。ところが政治家にでもなろうという人物ですから学者のような地味な仕事は――ということと、「君はどうか」と私に話をした。私は政治学ならば行きたいけれども、他の学科じゃ行きたくなかった。同志社からの話は刑法の先生であった。刑法じゃ私はやる気がしない。そのうちに山本君は身体の關係もあり、政治家になれないので学問でもしようという気持ちになってきて、結局、山本亀市君が同志社へ行って、刑法をやることになった。ところがそれまで先生になるという考えもなかったから少し勉強しなきゃいかん、ということで牧野英一先生の助手にでもらって勉強することになる。が結局、身体が十分ではありませんで、同志社に行ってもまた再発をして亡くなったわけです。同志社で教員をしたのは一年くらいだったと思います。そういう關係で私の話が始まったんですが、山本君が同志社は政治学もいるんじゃないかろうかと動きだし、私の道を聞いてくれたわけです。そこで結局、吉野先生と海老名先生の推薦で原田総長に引合せていただいたわけですよ。

海老名先生は、青年たちが毎月寄って話を

している際「お前は学問をやった方がよい」と言っておられたので、私を推薦なすったようですよ。吉野さんの關係は、吉野さんの寄稿していた本郷教会の雑誌の筆耕を私がやっていたんで、編集會議等で私というのを知っておられたようでした。その時、吉野先生から「不得要領要領居士」というあだ名をもらったことを忘れないでおります。私は喋ることが不手なものですから、大きな声を出して要領よく喋れないんで非常に不得要領にみえるらしいんです。人間はなかなか要領がよく書いてるので、吉野先生は「不得要領要領居士」と誰かに言ったことをおぼえております。それで七月に卒業すると同時に二十五円づつもらうことになったわけです。それから専門のことですけれども「政治学をやるのなら政治学史をやった方がよい」という勧告が同志社からありました。誰がそう言ったかという、滝本誠一さんでした。東京の方でも小野塚先生が「まず学史をやるがいい」と言われましたんで、東大の図書館で政治学史の古典を読みはじめたんです。

『同志社論叢』第一号に「ギリシア思想の体

系とその政治思想の内容」がのっています、ギリシアから始めてルソーあたりまで古典を読んだわけです。同志社に行つて最初が専任講師で、五十円の月給をもらいました。それから助教授をとばしてすぐ教授になったわけです。私には助教授はなかった。講義は予科の法制経済と、法学部で政治学史をやった。

私が行くために手紙のやり取りをしたのは楢田民蔵さんでしたが、楢田さんは私の行く前に大原研究所に行かれて、滝本誠一さんが法学部長になられた。滝本さんはずいぶん読書家でして、その蔵書をすっかり同志社が買収したので豊富な文献ができたのです。そして私とはちょっと重なっているだけで、滝本さんは慶応へ行つた。そのあと中川精吉さんが法学部長になられた。中島重君は既に同志社におりました。中島重君と私とはちょうど一廻りほど年がちがうんですが、中島君も胸を悪くしてほとんど学校に出ず、当時四年制だった大学を六年かかって卒業したわけでした。それで結局、山本龜市君と一緒に卒業した。その他、同志社にもとからいたのは亡くなった黒川芳蔵君、高木庄太郎君……。

住谷 阿部賢一先生。

今中 後に石田秀一郎君が来た。

住谷 栗生超夫先生。

今中 これはちょっと遅れて九月ごろ来たと思います。経済学史の山口正太郎君が一緒。それから経済原論の瀬谷佐次郎、恒藤さん、そんな連中が赴任してきたわけです。

住谷 古屋美貞は？

今中 あれはあと。それで九月にその連中はみな教授になり、いよいよ大学が始まった。

住谷 楢田さんと滝本さんが喧嘩して、楢田さんが部長の時、滝本さんを首切つて自分もやめたということを書きましたが？

今中 いや、いましたよ。滝本さんは。楢田さんの方が逃げ出した。二人が喧嘩したことは聞いております。それは私が行く前です

ね。よく知りませんけれども。

住谷 さらに楢田さんはね「恒藤君は私が部長の時に京大で不遇だったんで同志社に呼んだ」と言われたんですが……。

今中 そうです。

住谷 楢田さんの話の通りですか？

今中 ええ。

住谷 私も楢田さんと手紙のやりとりをしました。久留間鯨造さんが楢田さんのあとがま

になり、その久留間さんがやめるについて、私が後を受継いだんで経済学史を。

今中 楢田さんの辞職が何年ですかね。住谷さんのお話とくちがっています。

さきほどの恒藤さんの話はおっしゃる通り不遇だったんですね。しかし法学部が始まって『同志社論叢』を出すのはもっぱら恒藤さんの仕事で、われわれはただ原稿を書いて加勢をしただけです。

住谷 当時の法学部の規則を起草したのは恒藤先生だったと聞いていますが……

今中 そうでしょう。そういう仕事のできる人でしたからね。

海老名先生のこと

住谷 先生が同志社をやめた時の理由をおうかがいしたいんですが。

今中 当時、総長の任期は何年でしたかな、それと関係があるんですよ。海老名先生は総長になるについて問題がありましてね。原田先生が辞めたあと、先生にもいろいろ話がありました。同志社内部に海老名先生に対する反対があり、先生自身もあまり乗り気ではなかったんです。青年の教育に興味はもって



氏 磨 次 中 今

いたわけけれども、同志社に行けない理由があった。かつて「京都あたりにちっけな同志社なんか作ってたでめだ、京城にもっていけ」という発言をされて、これが非常に災いをしたわけです。それとも一つの問題は募金をやらなくちゃならないが、先生は募金に向かない、と。これは万目の見るところ一致している見解でした。その二つの問題があって、青年を指導する総長よりも財政をたてなおす総長がはしかつたんですね。だから海老名先生は必ずしも適任ではなかった。ところが他に良い人がいないので、財政的な人物をくつつけるということで、話が落着いた。その財政を引受けたのが足利武千代さんです。足利銀行の頭取だったのをやめさせて……。最近亡くなりました。

住谷 今中先生が海老名先生の意見に反対し

たというのは？

今中 いや、それはやめる時の話。今度はやめるいきさつについてお話ししなきゃならない。

財政たて直しがなかなか難産だったわけですね。一つは理事会との衝突。その理事の中心に動いておったのが小林正直、西村金三郎。この二人と喧嘩をしたわけです。

住谷 誰が。

今中 われわれ。西村という人は東大で吉野先生と同期だった。同志社に行くとき、吉野先生はわれわれを西村に紹介してくださったわけで、大いに援助してくれるものと思っていたが、どうも意見があわんのですね。コンマシーリズムで、向うは。その当時、年々の赤字はざっと三万円くらいですね。私の計算では九〇名くらいに学生をふやしたならば何とかトントンで行けそうだということで、学生増募を主張したんです。ところがクリスト教主義というんで少数精鋭主義でいくという。われわれの主張が、通らんわけですね。少数の学生で財政をまかなってゆくためにはどうするかということで、結局、岩倉土地問題というものが出てきた。これについて

もわれわれと理事の意見がいまssenで、議論をしていたわけなんです。

そのうち、どうしても金が足りないから海老名先生に「アメリカへ行つて募金してこい」ということになった。これにも反対をしたわけだけれどもね。結局、海老名先生はアメリカへ行かれたが、募金はして来なかったわけです。それで何ら財政上の成績があらないので先生に対する非難が集中してきた。

その頃ようやく総長の任期がきたわけです。それがたしか大正十四年だったと思う。それで「先生はどうも適任ではないので、これ以上やっているとな先生自身がお困りであろうから、ここでさっぱりおやめなさい」とわれわれは極力やめることを説いた。ところが先生はむづかしい問題を残して、後継者もないのにやめるのは無責任きわまる、というのでなかなかふん切りがつかない。それで先生にふん切りをつけさせるため「われわれはやめますから先生もやめてください」ということで私はやめたわけです。それが大正十四年の十一月ですが、私が法学部長をやっている任期の切れる時だったからよく覚えてる。

ところが先生は私の辞表を握ってなかなか



住谷悦治氏

発令してくれない。ですから「実は私は京城からの話もありますから私についてはご心配なく」と言ったんです。先生は非常に喜んで「お前のことを心配していたんだ。やめたあと心配がないならやめろ」ということになったやめたんですな。京城の話は前にあったが、その時は断ったわけです。浪人しておれば先生方がなんとかしてくれるだろう。どうしても辞めさせてくれんと思つたものですから京城の話もちだしたら、先生、本気にしてやめさせてくれたんです。

もう一つ付加えると、西村理事が「同志社大学は羊頭をかかげて狗肉を売るものだ」と言つたわけですね。それで私は非常に憤慨して「そんなことを言われて同志社にいたることできない」というのが最後の決意となつた。また父兄会を作れとか、中学校か高校の

ような教育をしろというわけですよ。

海老名先生もいやいやながらやめられなかつた。そこへあの有終館の火事だつた。

住谷 ちょうど、天皇が御所に泊っていたので、恐れ多いということで理事が全部やめたんです。そして海老名先生を除いて残りの理事を再任してしまつた。それで海老名先生は非常に憤慨して同志社をやめた。いよいよ京都を去るという時、学生は京都駅まで送つたんですけれども、その時、海老名先生は「同志社は学生のものであり、理事のものではない」という大演説をやつたんです。学生は皆泣きましたよ。

今中 海老名先生がアメリカへ募金に行った時、塩見清君を知つたんだね。国際法の先生として連れてきたわけですけども、人間がさっぱりした人だつた。

住谷 和田武さんが、財政学をやつていました。非常な秀才で、やはり吉野先生の紹介で同志社へ来たんですね。この人は面白い。講義の最中に「オイ、ちょっと小便してくるか」と言ふんですよ。

今中 あれは休講が多かつたでしょう。それから山口君の講義というのが面白かつたらし

いな。ちゃんと合の手をノートに書いてあるという……。ちょっと同志社の肌にあわなないのが頼谷でしたね。

高木 幸 波多野鼎先生はあとでしたか？

住谷 波多野さんは大正十一年。

高木 幸 一緒にいた時期がありますか？

今中 ええ、一緒にいましたよ。

住谷 私は波多野さんと一緒にきて、その年の十二月から一年間軍隊に行きました。私が新しく講義を始めたのは十三年の三月からでその時、すでに能勢克男さんや林要さんが来て講義をしておりました。

今中 山本君が亡くなつたあと、河野密君が講義されましたね。

住谷 河野君は私と同期で卒業して朝日新聞に入つた。あの人はドイツ語がよくできるので外報部に入つた。仕事をさつと終えて、あとはマルクスの「神聖家族」を、訳していった。高原操という人が編集局長でね「河野君は勉強ばかりしているんで仕事のがみにくくて仕方がない。タバコでもすつておれば仕事をたのめるのに」と吉野先生に不平を言つた。それで河野君は、高原によびつけられて「君は新聞記者に向かないからやめろ」と言

われた。「はかないものだな」と河野君はこぼしていました。それで私、ちょうど同志社で刑法の先生がいないものだから来てもらおうようにした。

今中 なるほどね。それで吉野先生のお声がかかったんですね。

住谷 ちょうどその頃、風早八十二君が九州大学の刑法をやり、河野君が同志社の刑法をやることになった。

高木 幸 波多野先生は満鉄の東亜経済調査局からいらっしゃったんですか。

住谷 そうそう、波多野さんは満鉄からお入りになって、大正十一年から講義を始められた。

今中 それから九大に入ったんですね。向坂逸郎君が石浜知行君に呼ばれて。

国体明徴と同志社

住谷 今中先生がおやめになって、昭和四年に岩倉問題で中島先生と能勢さん、高橋信司さん、高橋貞三さんがやめ、その後、昭和八年に私と長谷部文雄君がやめたんですが、具島先生がいらっしゃったのは？

具島 昭和六年ですね。同志社のことは、九

大に在学中から波多野先生にきいておりました。卒業して助手になってから間もなく今中先生が来られた。助手の任期が終る頃、今中先生から「同志社に行ってみないか」という話がありましてね。それと私は助手の頃、ヒルファーディングの『金融資本論』に非常に興味があったんです。あれを林要さんが訳しておられるわけで、林さんのおられる所だから面白いかも知れないと考えたことと、住谷先生と長谷部先生にはお目にかかったことはないがお名前だけは知っておったので、結局今中先生のご紹介によってまいりました。ところが学部長が当時、古屋美貞先生でした。何か口頭試問みたいなものがあつたようでした。

住谷 あの時、私は具島さんと呼ばれたんですが、一方、古屋さんや黒川さんらは具



具島兼三郎氏

島さんだけを呼ぶことは均衡上困るということで、土井十二という人、お医者さんで法医学をやらせればよいというのでね。両方を同時に入れることでうまくいった。

今中 だきあわせですね。

具島 そんなことで同志社にお世話になるとになったんですが、住谷先生に家を世話してもらったんですね。先生のお宅の近くの下鴨松ノ木町でした。家が近いものだから住谷先生のお家にたえず出入りいたしました。林さんの家も近かったですね。

ところがもう一つ、足利武千代さんが近所でした。足利さんが来てたえず世話をやいてくださった。あの方には非常にご厄介になりました。ところが老人だもんだから、実に朝早いんだ。朝早くいらっしゃるものだから、こちらはまだ寝呆けててね……。

住谷 いい先生が来たというんですね。あの人は同志社を愛していましたね。今度、今中先生の紹介でいい先生が来たから、というので非常に熱をあげていた。

具島 同志社にきて最初びっくりしたのは、非常に年をとった学生がいることでした。ね。ともかく官立では年令はいちおう平均してい

るわけですね。そう開きがない。ところが

同志社に行ったら自分と同じくらい、或は自分より多いんじゃないだろうかという学生がいるのにびっくりしましたね。それからもう一つ、私立大学では事務組織が非常に簡単なおどろきでした。官立に比べると。同志社では僅かな人間でやっている。これもちょっと意外でしたね。だんだん同志社のことがわかってきてからは、同志社は非常に複雑なところだという感じを受けました。

住谷 年とった人云々ではね、たとえば長谷部君と中学の同期生に飯義寿という人が今治にいたんですよ。すでに子供が二人いて、同志社に入ってきたんです。教室では長谷部君の講義を聞いていて、外へ出ると「おい、長谷部！」という調子ですね。

具島 私はそれほどじゃなかったけれども、そんな学生が自宅に遊びにくるわけですね。その時はまるで子供扱いされてね。それから驚いたのは婦人の学生がやってくるのですね。

高木幸 的野屋さんでしょう。

具島 法学部の的野屋さんが私の所へ来て、私がまだ独身でしたからね。「お嫁さんを世

話しましようか」というのです。

今中 大学に女性が正式に入ったのは私学では同志社が最初で、足利さんが骨折ったからですね。足利さんはその点だいぶん進歩的ですね。

具島 住谷先生が警察に引張られて、私が差入れに行った記憶がありますよ。

住谷 あれは昭和七年です。八年にもまた引張られた。最初の時は下鴨署に来てくれたんだ、あなたが。

具島 あわせてもらいたいと言ったけれどもあわせないですね。それで何か物だけ渡して。あの時は先生がなにか旅費のカンパをさして……

住谷 能勢さんから紹介された青年に旅費を五十円貸した。私は三十円しかなかったの具島さんに二十円かりて渡した。その青年がのちにつかまって、旅費の出所を追及されて私も引張られた。

ところで具島さん、同志社をやめるときにだいぶん問題があったようですが。

具島 そうです。あれは京大の滝川事件があって間もなく起りましたね。

住谷 昭和十一年ですね。

具島 野村重臣君が人を誹謗するような論文を『同志社論叢』に載せてくれたといってきたのを編集者が拒否したところから始まった。

住谷 松山斌（武司）君が部長だった。

具島 当時、軍の圧力が非常に強く、国体明徴ということが言われており、それに抵抗できないような雰囲気になっていた時期です。法学部の中にも軍部と連絡をとっていた人がいて、法学部の誰それは国体明徴の精神に反するからやめさせろという上申書を出した。その当時、最初、目標になっていたのは田畑忍君でしたね。京大事件で滝川さんや佐々木さんがおやめになったあとで「田畑は佐々木の弟子だ」というので攻撃の目標にされて怪文書がしきりに出されましたね。

高木暢 私たちのところへも、怪文書がきてね。田畑さんはマルキストだとか、具島さんはプロダとか、一人一人名前をあげて。

具島 それで上申組と非上申組という工合に対立が激化して、すったもんだがあった。当時総長の湯浅さんが自分で頼まれたのか、向うから乗込んできたのか知らんけど、中島今朝吾という憲兵隊司令官が調停をするといつて、乗込んできた。そして法学部の先生方は

一人一人別々に呼び出されて面会したわけですね。他の人はどうだったか知らんが、僕は中島司令官に呼ばれて、非常にこやかな態度だったけれども「どうかね、おれに一つ解決をまかせてくれんか」「ああ、いいです」「それじゃ君、辞表を書いてくれんか」というわけです。私も憲兵隊がここまで出てきた以上はただではすまんと思っていましたから、「ああよろしい、書きましょう」といって、辞表を出したと思うんです。湯浅先生が非常に心配されて「やめなくてもいいじゃないか」ととめて下さったのです。当時、東京に国民精神文化研究所というのがありましてね。あそこに内地留学ということにするから辞表は引込めてくれという話があったように思います。湯浅先生も非常に苦労しておられて、何とかしてわれわれを救ってやろうとされたのです。われわれとしてもそれを非常に有難く感じたわけです。けれども国民精神文化研究所に行くことは自分の思想がまちがっていたことを自認したことになるので——国民精神文化研究所というのは、思想的な感化院みたいなものだから面白くない。それからといって湯浅先生がわれわれのことを考えてや

つてくださるのに辞退するのはどうも申し訳ない。湯浅先生のせっかくのご親切をお断りする以上、その責任だけはとる必要がある。そういうことでやめてしまった。

住谷 田畑君は国民精神文化研究所に行ったんですよ。

具島 そうでしたか。

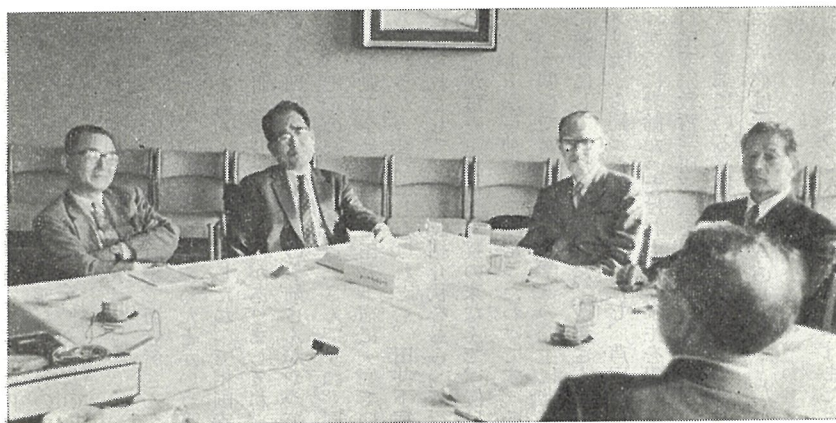
住谷 わたしその相談を受けましてね。「どうしようか」と言うから「かまわないからだまって東京へ行けばいいでしょう」と私がすすめたんですよ。それで、東京に行くだけ行っただけで、研究所には出なかつたそうですよ。東京で勉強していた。

高木暢 湯浅先生は最初、野村重臣を切る方に強い線を出していたと聞きましたか？

住谷 湯浅さんは非常に苦労していた。お宅に反動団体が刀をもつて入ってきたこともあったそうですよ。

具島 湯浅先生が非常に苦労しておられることがわれわれによくわかっていたものですかね。

住谷 林要さんの場合も湯浅さんが守って守って守り通したんです。しかしどうしても守り切れないからやめてくれということをやめ



させた、と言っていました。

具島 林さんは私より前にやめたんですよ。私がやめたのは林信雄君と二人一緒でしたね。

住谷 昭和十二年でしたね。

具島 住谷先生の随筆集にのっている林要さんの最後の講義がありましたね。「猿が人間にならないうちにやめる」という。あの講義は印象に残っていますよ。大入り満員だったことを覚えています。私も後の方で聞いていたんです。

高木 幸 林先生が講壇で涙を流されたということを私どもは間接に聞いたんですがね。

学生運動とYMCA

住谷 高木さん、同志社においてになったのは何年かは？

高木 暢 具島さんのおいでになったのは何年ですか？

具島 私に昭和六年の八月から。

高木 暢 吉田さんは？

吉田 私は八年です。

高木 暢 じゃ私の方が早い。私の場合は少し皆さんと事情がちがうと思うんですけど、私



高木暢哉氏

は昭和五年に同志社に入ったわけですよ。

それまで六高(岡山)にいて健康を悪くしたので、療養していたわけです。家が岡山県の玉島という町で、倉敷からそう遠くない所です。療養中に宗教的なことや哲学的なことを考えていたわけです。私の家が玉島教会と関係があり、そこに倉敷から田崎健作牧師が応援にきていたんです。父が郵便局長だったので、局員に精神修養のため田崎さんと呼んだことから、私の家とのつながりができたわけです。倉敷という町は特殊な町でして、工場都市であると同時に文化の町でもある。その場合に倉敷教会が非常に大きな役割を果たしている。田崎さんは非常に青年を愛する人で、倉敷教会からたくさんの方が同志社に送られてきている。たとえば宇野勇次さん。古くは山川均さんも出ています。面白い土地

柄だと思うんですが、玉島はその思想圏内に入っている。僕がそういう状態だったものだから同志社へ行けとすすめられたわけですよ。それで昭和五年に入ったんです。

ちょうど同志社騒動の直後で海老名さんがやめたとか、中島重さんがやめたとかいろいろ話を盛んにやっていましたね。で相国寺の門前町に田井という下宿がありましてね。これを田崎先生の奥さんのお姉さんがやってた。そのの娘婿が高橋貞三さんですね。同志社騒動でやめさされて田井下宿に夫婦でいるというかっこうでしたけれども。田井下宿に送られてまして、その時紹介状をもらって行った先が富森京次神学部長の家なんです、僕はスタートから神学生なみだったわけですよ。そういう関係で富森教授や神学部の先生に非常に親切にしてくださいました。有賀さんがアメリカから帰ったばかりでしたし、芦田教授はすでに老齢だったけれども、学生を集めて自宅で宗教哲学研究会を開いていました。いま文学部にいる平石善司氏は僕より一年上だった。彼は予科でYMCAのリーダーだった。

僕が高等学校に入った大正十五年はまだ牧



高木幸二郎氏

歌的なんびりした時代でしたが、療養中にすっかり世の中がひっくり返っちゃったんですね。同志社の予科に入った頃には学生運動が激しくなっていた。昭和六年に予科で出した『同志』という学生の雑誌なんかは真っ赤な色で労働者がスクラムを組んでいる表紙でこれは相当問題になったらしく、その年の五月か六月に激しいストライキがあった。

僕は同志社にきて新島精神というものをやはり探したと思うんですよ。当時、YMCAは何派かに分かれていましたが、私はエバンジェリクな純粋福音といったグループと接触していました。けれども急進的な社会的キリスト教研究会の方のゆすぶりが多く、僕にも研究会にやって来いといっておりましたし、僕自身いろいろ考えたわけですね。もっぱら社会問題とはちがって、思想問題ですか

ら。それでエバンジェリクな行き方をする人たちにもひかれていたし、一方で社会的な問題にぶつかっていくという行き方もサイエンスしてやって行かなくちゃならないんじゃないかと思ってひかれていた。その二つが安易に結びつくかどうか考えていた時にストライキが起った。予科の二年生の時で、YMCAがストライキに参加するかしないか、非常に問題になったわけですよ。

この頃、社会的キリスト教研究会というのはますますラジカルになり、昭和七年に京都のYMCAとしては歴史的な事件である東山荘事件を起すんです。そんな中で僕自身さんざん考えさせられたんですよ。「上部構造にとり下部構造が経済にあるとするならば経済を勉強しなくちゃならない」と。そういうなかで唯物史観とか弁証法とかを勉強することになったわけですが、これが結局ジレンマになってしまふ。で三年生になって上へあがれない、どうするかということで、それを田崎先生が聞きつけてきまして「お前、神学部へ行け」と。そういうことで進退きわまる状態でした。どうも神学部へは行けそうもない、哲学へ行こうかと思っていました。その際、

和田洋一先生の影響が非常に大きかったと思うんです。和田さんはその頃、哲学研究会をやっておりまして僕はその使い走りをするというので何回か集まっていました。もし経済をやるにしても同志社の経済は自分の立場としてはできない。結局、出ることを考えたわけですよ。きて出るとなると別にあてがあるわけではないんで、僕の友達が九大へ行くため受験準備をしていたのと、九大におられた今中先生の論文を時々読んでいたので、そんなことも頭にありましてね、九大にやって来ました。

「資本論」を読む生活

住谷 高木幸二郎先生、一高から移ってこられたことから。

高木幸 私は、クリスチャンではありませんし、予科から九大へ来たものだから、こういう会に出席する資格は余りないと思うんですが……。昭和四年に思想上の理由で一高を除名されて、そのあとしばらく実際運動の真似事みたいなことをやっていたことがあるんです。四・一六事件のあとでしたが、私たちの空想していたことは現実に当面してみる

と破たんするばかりで、結局行きつまってしまい、「もういつべんやりなおさなければだめだ」という結論になったわけです。友人とも相談しまして、やはり研究者として再起の道を考えなくてはいけないんじゃないかということになり、それじゃ東京に居ては腐れ縁が残ってだめだということで関西に来たんです。神戸に姉がいましたので、そこに行きまして、どこか再入学をするということを考えた結果、同志社に入ることになったんです。一高のことを履歴に書くとすぐばれてしまいますから、中学四年終了ということで入学願書を出して入ったんです。

そういう事情でしたからできるだけ勉強したいということで『資本論』を読むことだけを念願とする生活に入りました。できるだけ孤独を守るというか、そういう生活を続けるようにしたんですが、一人だけではやはりだめですから誰か指導していただける方を、ということになった。私の同志社での保証人は当時法学部に関西大学から講師できておられた木村健助先生だったんですが、木村先生から住谷先生を紹介していただいたんです。松ノ木町の住谷先生のお宅へ伺ったわけ

です。そしたらその時、具島先生がきておられたわけです。偶然に。

具島 ほう、そうですか。

高木 幸 二階の書斎で引見していただいたわけですが、書斎の壁の片面、天井から下までの書棚が書物でいっぱいにつまっているわけですね。私はそれにびっくりしました。学者の書斎というのは大変なものだ、というので……。非常に強く印象に残っています。なにしろ、大先生のお宅へ伺うのは始めてなものですから緊張して、先生がどういう風に話をほぐしていったらよいか、途惑われるような感じだったと思うんですが、そのうちに下から具島先生の詩吟が聞えてきたんですよ。

具島 私か！

高木 幸 実に音吐朗々としていて……それで住谷先生が「いま詩吟をやっているのは九大から見た具島先生だ」というふうに通じを教えられ、あとで紹介されたわけです。また法学部を卒業して助手になられたばかりの野村治一さんにも木村先生から紹介されてね、図書館の四階にある研究室やお宅へもよく伺いました。あの方はクリスチャンで申島さんのお話なんかよく聞きましたし、同志社につい

ての認識の多くは野村さんから与えられたわけですね。

それから昭和六年でしたかヘーゲル一〇〇年祭というのがありましたね。

高木 暢 昭和七年ですね。田辺元がヘーゲル哲学について京大で講演会をやった。

高木 幸 同志社でヘーゲル一〇〇年祭記念講演会があり、西田幾多郎さんが講演された。最初、丸川賢太郎さんという学生が「ヘーゲルとマルクス」とか何とかいう題でやった。当時、大学の三年生でした。

住谷 丸川君をよくおぼえておりますよ。

高木 幸 西田さんの講演というのを始めて聞いたんですが、まだお元気で、印象が強かったのをおぼえています。眼光けいけいとして、メモのようなものもたないで、演壇の上で全然聴衆がいるなんてことを無視したような形で、頭に浮んでくる思想をそのまま言葉に出しているような感じでした。ちょっと異様な印象でした。

住谷 場所は？

高木 幸 致遠館の二階だったと思います。聴衆はいっぱいでした。

私は三年目の春病気になるたものですから

思弁的な京都で

今のあと休んだんです。結局一年休んだため予科を四年やることになったわけですね。それで予科を卒業する目あてがついた時に「さてどうしようか」ということになったわけですが、病気がなおって帰ってきたら住谷先生はもういらっしやらなかったんですね。

住谷 高木さんが九大に行く前から波多野先生をご存知だと伺いましたが。

高木 幸 いや、まだ林要先生がいらして、林先生からも紹介していただきました。「同志社の学部へ進むか、国立ならば九大か東北大へなら傍系で行けるんだが、さてどうしようか」ということだったんですが、波多野先生が九大におられることと、当時大原研究所にいて、さきごろ亡くなられた笠信太郎さんなどからもすすめられたことがあります。その頃ドイツ語の勉強をすることを一つの仕事にしておりまして、力だめしに九大を受けてみようか、だめなら同志社の学部に行けるし、ということですね。それで受験したら受かったものですかから来ることになったんです。そう深い理由はないわけですね。

ここにいる吉田さんとは私の予科時代に一、二度おあいしているんですね。

住谷 吉田さんのころの同志社はどんな状況でしたか……。

吉田 私は九州大学の二年まで行ったのですが、九大へ入ったのは経済学士になるうというのではなく、先ほどはなしに出たような大正末期の学生運動のよりあがって来た時でしたから、福高（福岡高校）を卒業する時に「お前は九大へ行け、オレは東大へ行け」という具合に仲間で相談して、学生運動をしにいったのです。入学して間もなく病氣になったので、昭和三年の一斉検挙はまぬがれました。しかしはじめからマークされていたから、昭和四年一月に復学して四月にはやられてしまった。それも東京あたりでは問題にならないような——労農党の再建に加わったとか、アカハタを読んだとかいう理由だった。

二審の時には起訴状の朗読を忘れる、というほどかんたんな事件ですから、わりあい早く解決したんです。その時に私が一番考えたことは、「自分でできることをやろう」ということでした。そしてその時に合法的にやれた活動——筑後の農民運動に加わりました。そ

の時に痛感したことは、自分に全く法律知識がないということでした。そこで九大に聴講を申し出たところ、ことわられ、結局、同志社へいくことになったのです。

同志社では一年間で弁護士資格をとろうとしてガムシヤに勉強しました。ちょうど京大事件の直後で、恒藤先生に法理学、森口先生に憲法を学びました。一年間しか家から援助を受けない約束をしていたんですが、無理をしすぎて病氣になってしまい、そこで方針をかえて学校を三年間つづけることにしてあとの二年間は働きながら行なった。アルバイトで友人の論文代筆なんかもやりました。

同志社へきた当座、下宿がきまるまで、具島先生のところをやっかいになっていました。そもそも同志社入学の時の保証人も具島先生でした。

具島 そうそう。君が筑後の方で何かやっている、というはなしはきいていたけれども、やはり大学は出た方がいいよというわけで、同志社にこないかという手紙を出したことを記憶している。

吉田 そうなんです。具島先生は九大の先輩でもあるが、同志社へくる時の身元引受人で

もあつた。あとで大学へ残らんかといわれたのも具島先生や田畑先生などでした。学生運動を通じて感じたことは、東京はたいへん政治的であるし、京都は思弁的であり、九州は九州人の性格もありまして、比較的实践的です。それで勉強するのは京都の方がよろうという気持ちもありました。しかし、もちろん具島先生から呼んでいただいたことが決定的になりました。

ところがわたしにとって、同志社時代というのは全く無風時代というか、表面に出て何もやらなかった。とにかく先ほどもいいましたように、弁護士資格をとることが何よりもの目標になっていましたから。

具島 君はね、成績が非常によくて授業料免除になったのではないか。

吉田 そうです。植崎奨学金とかいうのがあって、これを二年からもらいました。そのころは野村重臣先生とか、土井先生の講義をきいていたのですが、やはり講義を通して先生思想がわかるし、タネ本というものも大体見当がつく。そこで昭和八年だったと思いますが、先生の先生のところへ行こうというわけで京大の講義を聴講するようになった。と

にかく同志社時代には前歴は承知の上で、みんなに非常に親切にいただきました。

三年生の時にちょうど同志社五十周年記念式典がありましたが、その式典には大阪の師団長をしていた賀陽宮とかいう人が軍刀をぶらさげてやってきた。記念写真にはそこだけ不敬にならぬようにと紙がはってありましてね。この五十周年記念の時に『同志社論叢』が別冊で学生論文特集を発行したので、それに「債権の本質」という論文を載せてもらった。それがもて、同志社に残らんかというはなしが出たようです。ところが当時の教授陣は真二つにわかれており、否決される可能性も大いにあったから、もし否決されたら傷つくし、かえてやめた方がいいだろうということになった。

あまりいい就職もなく、事務助手で同志社に残らないかというはなしもありましたが、当時学生部におられた生島吉造先生から郷里の近くの日本炭鉱に行かないかというはなしがあつて、それを森口先生のところへ相談にいった。

森口先生から先生の居間で長時間にわたり真情あふる説得をいただいた。その時いわ

れたことは「学校へ残ってノリと鉄で外国の論文をつぎはぎすることだけが学問ではない。何をしてもどこにいても、学問に対する情熱をもっていれば、学問はできるはずだ。助手として採用されているのならともかく、もう三十歳近いのであるから就職しては……」というのです。そこで日本炭鉱に行くことになりました。その時に田畑忍先生が、「学者になっても給料は安い困るぞ、会社へいくのならば重役になれ」といわれたのを憶えています。ところが入社してみると、なかなか勉強もできないし、重役にもなれそうにない。そこで満鉄調査部に二度入ろうとした。しかし運命というのはわからぬもので、その後参議院選挙に出たり、北九州市長になったり……ということになってしまった。

住谷 具島先生にうかがいたのですが、チャペル籠城事件のはなしを……。これは高木さんの時代ですか。

具島 それはわたしは知らないですね。

住谷 今中先生が学部長の時でした。学生運動ではじめて同志社から検東者が出た。沢田正雄、内海洋一、大浦梅夫、宮崎菊治。京

大では淡徳三郎を中心に鈴木安蔵なんかが多数検束された。

今中 わたしが部長の時には、学生にある程度権限をもたせて、民主的な話し合いの場をつくらうということで、学生の自治会——学生協議会をつくりました。これは学生が自主的につくったというより教授会がつくったのです。ところがだんだん学生の力が強くなってきた。

高木 幸 波多野先生が同志社をやめて九大へこられた事情というのを、以前にちょっときいたことがあるのです。正確かどうか知りませんが社会思想史の講義をされていて、『社会思想史』という本を出された。これがまた非常によく売れたんですね。ところが『社会思想史』という名前から、社会主義の本だと誤解され、マークされたとか。



吉田 法 晴 氏

今中 波多野君については同志社では何もなかった。

高木 暢 波多野さんが同志社でくさっているからというので、石浜知行さんがひっぱったということを書いたことがあります……。今中 そうです。

住谷 そうでしょうね。新人会で一緒だったんですから。

吉田 わたしの記憶では同志社時代にマークされて辞めざるを得なくなったのだと思っていた。だから九大にこられてからは非常に慎重だった。

今中 同志社時代にマークされたということとは特別になかった。

吉田 先生のお宅へ行っても玄関で立ちばなしはしたが、あげてくれなかった。

同志社にのぞむもの

住谷 最近の同志社のことは、あまりご存知ないかも知れませんが、過去のことと思ひあわせて、同志社はこうあるべきだということがあれば少しずつお聞きしたい。

今中 もう一つ申しておきたいのは、長田三郎君のこと——彼は京大出身で山本美越乃さ

んの弟子ですが、彼は最初わたしが同志社にいった時、予科の学生だった。どこかの小僧かなんかをやりながら苦学していた。しかし非常な勉強家でいつも最前列にすわっていて一番こわい学生だった。わたしはじめて講義する時だから全くこわかった。横文字なんかもまちがわないようによく調べて書いたものです。その後、昭和三年に九大にきたら、彼が助教授でいたわけです。

吉田 わたしは九大までは官立ばかりでしたが、同志社へいって一番強く感じたのは、先生が家庭の中まで学生を歓迎してくれ、個人的なことまで指導をしてくださるということですね。

今中 そういうことはありましたね。

高木 暢 ばくも全く同感ですね。のちに下鴨の中川原町に下宿を変ったんですが、近くに和田洋一先生が住んでおられた。学校へ行く時なんかに会うと肩をたたいて追いかけていられる。二宮源兵さんもそうだった。だから何か困ったことがあると、夜一時、二時ごろまでこの二人の先生の家へおしかけて行って、はなし合ったりして随分迷惑をかけた。今になって思うと本当によくやってくださった

たとつづく思いますね。

住谷 今は教職員の数も多いから不可能ですが、わたしたちが同志社にきた時には、海老名先生が新任の教員を自宅に招いて、家庭ぐるみ歓迎してくれたものです。

今中 そうでしたね。

具島 しかし最近の同志社はマンモス学園になりましたね。

住谷 もうとても教師の方から学生にアプローチするということはできませんね。

今中 同志社には縁故のあるいい先生たちが多いのですが、そういう先生たちを戦後呼びもどして同志社をよくしていくという努力が少し足りないようです。ここにいる方々はみなそうですがね。

住谷 戦後マッカーサー指令で自由主義者は学校にもどれということになった。その時にわたしももらったのですが、同志社からガリバン刷りのハガキがきた。ごくかんたんに、「来るなら来い」という調子だったので林要先生なんかはあまり気持よくなかったといっておられた。

具島 そうそう。あれは全く愉快でなかったね。

住谷 長谷部君はすでに「資本論」の翻訳をしていた。林さん具島さんは東京にいた。わたしは失業して京都にいました。結局、復歸したのは和田さんとわたしだけで、ほかの人はみんなかえらなかった。

具島 結局住谷さんだけでしたね。しかし住谷さんが総長になられたのですから、同志社もかわったものですね。

吉田 どの私学でも同じだと思いますが、とくに同志社の場合は新島先生の建学の精神による教育と経営をどのように調和させていくかということが一番重要な問題ではないのですか。

住谷 いま同志社大学への学園内高校からの進学者は、全学生の約二〇％で、一般高校から進学者が八〇％を占めている。そういう点でもなかなか一貫した同志社教育がおこないにくい状況にある。

吉田 正直に言ってわたしは新島精神にあらがれて同志社へきたのではなかったけれどもしかし四年間チャペルにも出だし、早天祈禱会にもいきました。そして自然に新島精神にふれることができた。こういうことは先生を通じてあまり意識しないままごく自然におこ

なわれていたと思う。

住谷 それはいいことですね。わたしは決って新島先生を神格化しない、いつまでもいい先生として、良き先輩、友人として考えたいと思っています。新島先生の生涯は、文学的表現になりますが「魅せられたる魂」で全く同志社をつくるために生涯をうちこんだ。早稲田の野党精神というのは今ではほとんど常識になっているし、慶応の独立自尊といっても一般化している。そういう点では同志社の建学の精神というのは自信がもてると思うのですが。

高木暢 とにかく清潔ですね。

今中 しかしプロテスタント自身が停滞していると思う。プロテスタントが後退したのではなく、まわりのものが進歩した。これが同志社の前進をはばんでいると思う。これをなんとかして突破する必要がある。

住谷 そうですね。新島先生が死を決して脱国したあの勇気が必要なのですね。

今中 「人の上に人をつくらず」という福沢諭吉の建学の精神は今でも立派に通用すると思いますし、早稲田の反骨精神もやはり生きていますね。今日における新しい新島精神

というものはどうなんだということを具体的に考えなければならぬ。これは結局キリスト教の問題だと思ふんです。キリスト教自身は十六世紀のリフォーメーションの思想でなく、二十世紀の思想とならなければならぬ。そういう意味においては、住谷さんが総長であるということに非常に期待がもてる……。

高木幸 住谷先生を総長にえらんだということのなかに意義をみつけないければならぬ。
今中 そうです。そこに一つの光明がある。

高木暢 何か型にはまらない……。

今中 社会的キリスト教にしても、どうしても限界がある。壁をうちやぶることができないですね。マルキシズムなんかもと入れ前進しなければならぬ。今でも教会は、反共、反共をいつているわけですからね。そういう意味で現代のキリスト教は、对国家的には進歩的であるかも知れないが、思想そのものから考えると、非常に保守的なのですね。

住谷 わたしが助手になったころ、今中先生は教授会でよく議論されましたね。

今中 恒藤さんが相手でした。

吉田 いまの学生運動について言いますと、学生の気持ちについて、やはり理解していただくことは教育者として必要じゃないかと思っています。キリスト教精神とか新島精神とかが今の社会にどういう具合に役立つかという時に考えざるをえない。感受性の強い学生たちですから、或は行過ぎもあるかと思いますが学生の気持ちをわかっていただきたいと思ひます。

住谷 わたしね、同志社の学生に深い知識を養成すること、正しい批判力をもつこと、深い教養をもたなければならぬ、と言っています。それから私たちの心がまゑとしては学生を愛すること、学生を敵に廻さないことを考えていますかね。

高木幸 わたしたちは今年になってから例のエンタープライズ事件で、会議々々で実際しんぼうしかねることもあったけれども、やはり学生を相手にして忍耐力を失ったらダメですね。こっちが先に怒ったら、絶対にダメなのです。

住谷 同志社は、今中先生のご存知の先生方はちやうど今年定年退職です。宗藤圭三先生田畑君……。田畑君は、六十五歳の第一次定

年。黒川芳蔵さんは亡くなりました。

今中 そうですか。同志社も大分かわりましたね。

住谷 今日はお忙しいところお集りいただきましてありがとうございます。お蔭さまで貴重なおはなしをおうかがいすることができました。それではこの辺で終えさせていただきます。



三浦重造え